

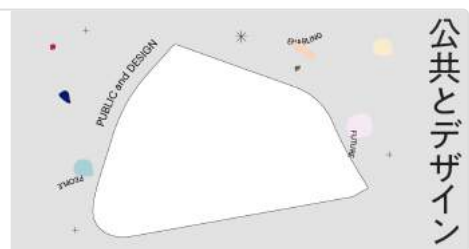
【公開用】プロジェクト・レポート

公共とデザインについて

私たち一般社団法人公共とデザインは「公共の再編を通じて、私の内なる光を灯す」をミッションに、企業・自治体・共同体と実験を共創するソーシャルイノベーション・スタジオです。

公共とデザイン | 公共を再編して、私の内なる光を灯す
私たちは企業・自治体・共同体と実験を共創するソーシャルイノベーション・スタジオです。

<http://publicanddesign.studio/>



住民との協働や生活者起点のリサーチ、実験やワークショップ等に基づく事業創出など、課題の当事者との協働からのプロジェクト創出に取り組んでいます。

この度、日本財団の助成金を受け、産むことにまつわる選択肢（不妊治療・養子縁組）をテーマにした当事者との協働のプロジェクトを企画しています。

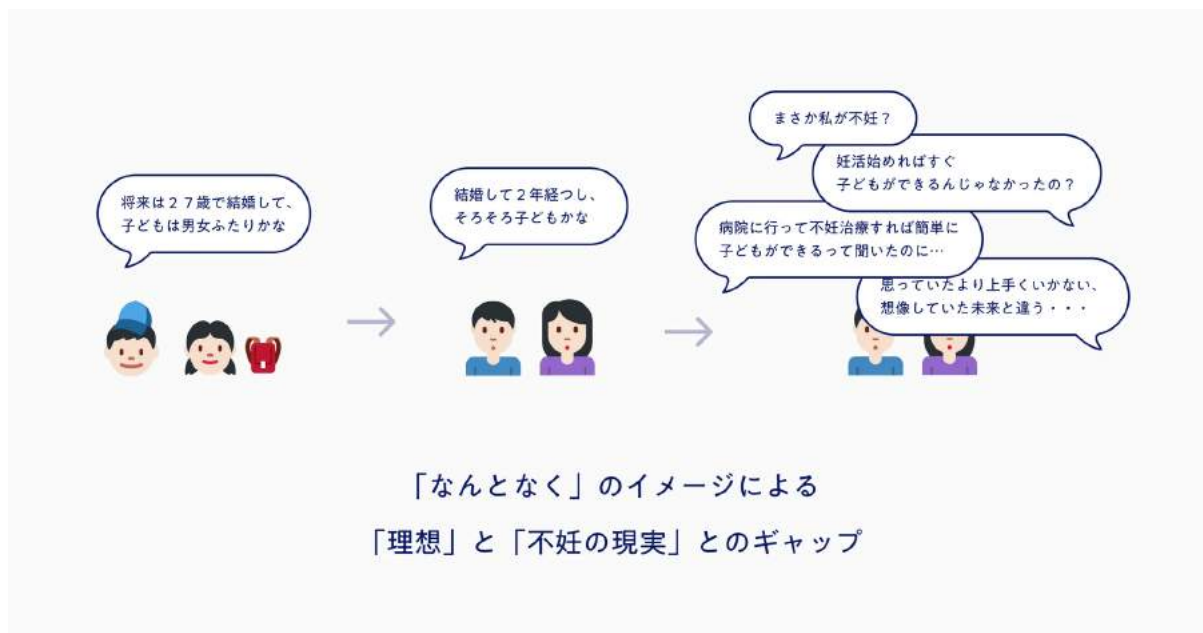
プロジェクトの立ち上げ

なにをやるのか

不妊治療や養子縁組などを通じて「産む」に向き合った経験をもつ当事者の方々と協働しながら「産むことの社会的イメージ」「存在するさまざまな選択肢」を問い直し、産むにまつわる重圧・悩みを固定化する社会に向けて提示することで、ひとりひとりが各々の「産む」にまつわる物語の向き直しを目指しています。

本プロジェクトでは不妊治療・養子縁組の当事者の方々や、生殖を専門とする医師や看護師などテーマにまつわる事業を推進されているNPO・専門家の方々へのヒアリングを経て得られた発見をふまえ、これからの「産む」について考え直す作品へつなげます。

なぜやるのか



女性を「産む機械」のように話す政治家がいたり、出生率は気にするけど生まれた後の子育てはとんでもなく大変だったり、いろんな難しさは不安定な社会だからこそ余計に感じざるを得ないのが現状です。ひとりで考えすぎても気が重くなり、気持ち沈んでしまいそうになります。しかし、「産む・子供を家庭に迎え入れる」ことを語りあう機会はほとんどありません。

どうしたら「わたしがどうしたいのか」「わたしとパートナーがどうしたいのか」を、不妊をはじめあらゆる可能性に想いを馳せながら、向き合うことができるのか。さまざまな可能性を想像しながら「子供を産むこと」「子供を育てること」について自分なりの価値観を形成できる環境が整っていないことに、強い課題意識を持っています。

わたしたち公共とデザインは、全員30歳。パートナーもおり、子供をもつことも検討しています。そんなわたしたち自身が、何よりこのプロジェクトを通じて、産むことに向き合いたかった。それを、より多くの人にも共有したい。そんな想いから、このプロジェクトを行なっています。

1. デザインリサーチ

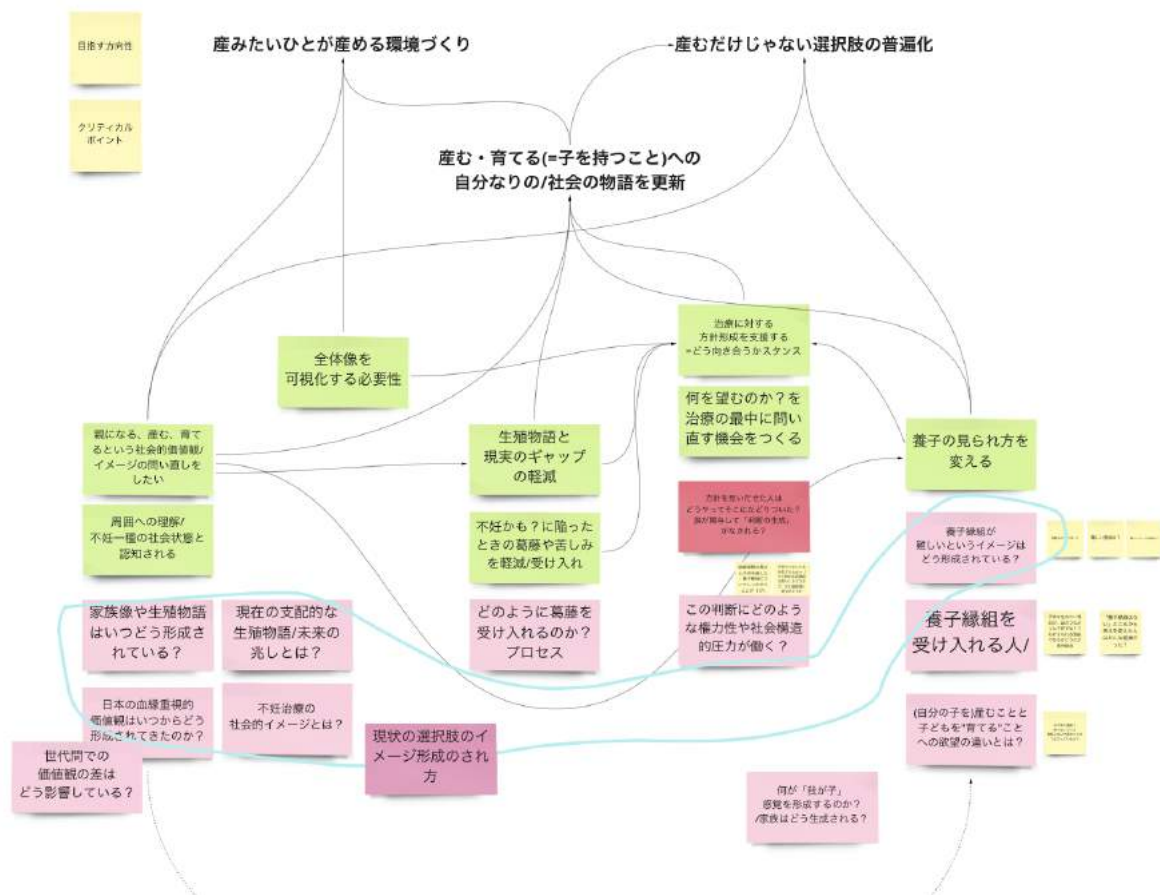
たとえば27歳で異性と結婚し、子供は男女ひとりずつ...といった具合に、多くの人が潜在的にもつ像です。これは多様な要因で形成されます。幼少期に遊んだおままごとセットや繰り返し見るアニメ、暮らしている住宅の間取り...いたる所に「当たり前の家族像」は前提として埋め込まれ、わたしたちに作用しています。

プロジェクトを立ち上げた当初は、「産むを問い直す」といったテーマしかありませんでした。いろんな記事や本を読みながら、「はじまりの問い」を見出していきま

した。

たとえば、約6割ものひとが生植物語の理想と現実にギャップを感じていること、また18.2%のカップルが不妊治療を行っていることがわかりました。生植物語とは、「27歳で結婚して、30で子どもを産んで、男の子ひとり女の子ひとり」といったなんとなくのうちに形成された家族や生殖にまつわるイメージです。こうした無意識につくられた物語が、現実への葛藤をつよく生み出しているのかもしれない。

そこで、ギャップに直面した人々は、どう「産む」へ向き合っているのか、その背後にはどんな“当たり前”があり、それらは何から影響されているのか、といった問いを設定していました。



初期リサーチからの方向性を検討

はじまりの問いを元に、様々な文献を読み、ヒアリングを行いました。ヒアリングでは、医師・看護師・不妊治療の経験者・特別養子縁組の養親・本領域に従事するNPO法人や起業家の方々など合計21名にお話を伺いました。

産むにはあらゆる当たり前が存在します。たとえば、不妊治療の葛藤や悩みは、教育における事前知識の問題だけでなく、当事者が周りに話をしづらい空気があり、それ自体がまた悩みとなります。

その空話しづらさも「子どもを産んで一人前・産めることが女性の尊厳だ」といった暗黙の前提が大きく影響しています。

情報の分析整理



不妊をめぐる全体感の可視化



ヒアリングや文献から得られた話や情報をもとに、子育ての検討や不妊治療などの経験や心理的な背景をビジュアルライズしたマップを作成しました。そこから、参加者とともに大きく探求していくテーマをデザインブリーフとして設定しました。

考えたい問いの抽出

- ・産める性/産めない性を引き受けた上で、“ふたり”の欲望を形成するには？
- ・産める性であることは女性の尊厳か？産めないことでその尊厳は失われるか？
- ・産めたかもしれない「わたし」を喪失した悲しみへの向き合い方/付き合い方とは？
- ・さまざまな状況ごとに「親になる」プロセスとはどういうものか？

デザインブリーフには以下の4つのテーマを立てました。このテーマは、後述するワークショップにおける対話の起点として活用されました。



Question

産める性・産めない性を引き受けた上で、 ”ふたりの”欲望を形成するには？

不妊治療をはじめてしばらく経つと、「産めないかもしれない」といった可能性が現実味を帯びはじめます。女性（身体性）にとっては、これまで「なんとなく産みたい」「当然のように産めるだろう」と思っていた状況に対して、治療に伴う身体的な苦痛・思い通りにならない時間的な拘束・不確実な中を漂う不安定さ・産めないことへの精神的な痛みも引き起こされます。そのなかで「わたしは、ここまですべて、なぜ産みたいのか、何を望むのか」を繰り返し突きつけられます。

一方で、その欲望に向き合いきれずに目を逸らすことが、治療のやめどきが見つからないケースにつながっていることも少なくありません。数人の方からは、「産むことやめると決めたことで胃の荷がおりて前に進めた」といった話も伺いました。さらには、「産む」行為そのものに関して「産めない男性（身体性）は、いまのところ100%の当事者にはなりません。不妊治療に関しても、原因が男女のどちらにあったとしても治療による負担は女性側に偏ってしまうのが現状です。

それでも、「産むこと」「子をもつこと」はパートナー同士、互いに納得しあえる共同決定が必要になります。産める性である女性が感じている「なぜ産みたいのか/産まないのか」と、産めない性である男性が「なぜ産むことを女性に求めたいか/求めないのか」といった厄介さも関わります。これは、例えば女性同士のカップルでも産むのは片方が担う、といった場合と同じ構造をもちえるかもしれません。社会背景としては、不妊治療への保険適用によって若いカップルの治療者も増えており、互いのパートナー関係が成熟していない段階から「いのち」に向き合えるのか、といった懸念も増えています。さらにいえば、「産む」に関わる関係者は、パートナー双方の親もいれば、社会的な重任、精子バンク等の普及を考えれば完全な第三者も介する場合があります。

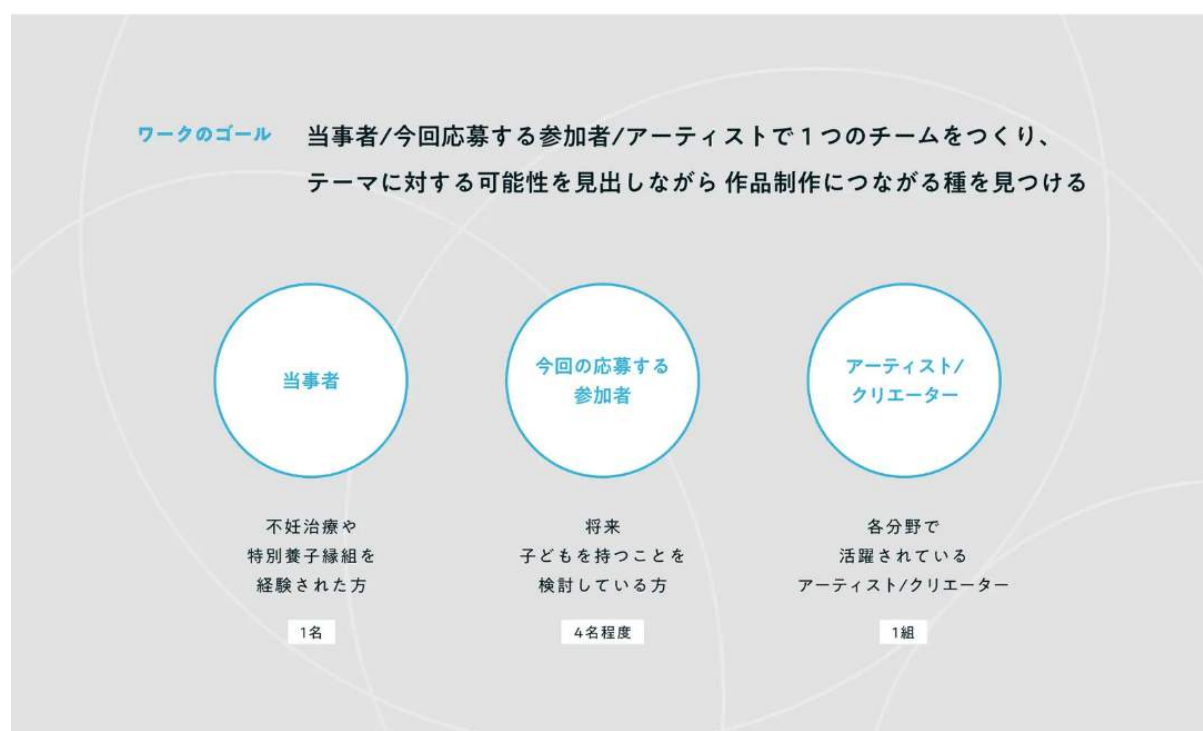
こうした広い関係者が「産む」ことにそれぞれの関心を向け合うなかで、とりわけジェンダー以上にバイオリカルな性の違いもふまえて、「産む」に向き合い、パートナー同士での「わたしたちはどうしたいのか」という欲望を形成していくことを、どのように考えていけばよいのでしょうか。

デザインブリーフの一部

② コデザイン・ワークショップ

コデザインとは、専門的な立場にあるひとだけでなく、状況の当事者ふくむ、多様な人々とともに、協働で新しいものごとをつくる過程です。

本プロジェクトにて、当事者とは「産むことに対して深く向き合った経験知をもつひと」を指しています。ワークショップは当事者、公募で参加するもやもやを抱えた一般参加者、作品制作を委託したアーティスト/クリエイターの3つのセグメントの参加者からなります。



3つの異なる立場の人々からなるチームをつくり、当事者や専門家へのリサーチに基づく「産む」にまつわるテーマについて深く対話しながら、個々人が作品制作を行う全4回のワークショップを実施しました。

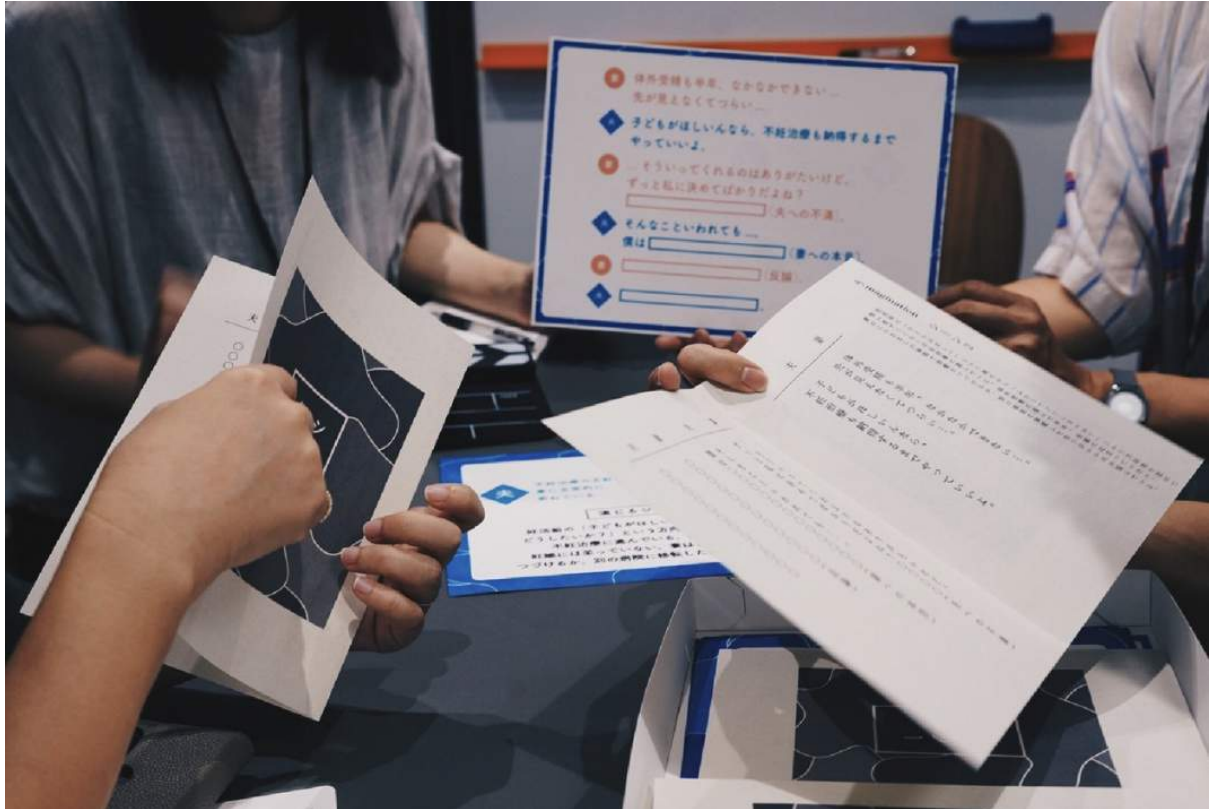
Day1 | オリエンテーション



全体プログラムの説明からはじまり、事前課題で用意した「今と昔の理想の家族像とその変遷の理由」を共有を行いました。村後、当事者の方々に経験談をきく座談会を実施。当事者には、妊活2年+不妊治療歴5年を経て、2020年7月出産した方、排卵障害（多嚢胞性卵巣障害）を患い熟慮を重ね「産まない」を選択した方、海外の精子バンクを利用し、2021年7月出産した方...といった方々に協力いただき、経験

をシェアしてもらいました。それに対して、参加者が感じたことを振り返りながら、自分自身が向き合いたい産むにまつわるもやもやを言語化していきました。

Day2 | イメージョン





リサーチをもとに制作した演劇ツールキット「うmagination」を活用し、養子縁組を取ろうか葛藤しているカップルのやり取り、医師に不妊だと知らされたあとのやりとり..といったシチュエーションをいくつも用意をし、その空欄セリフを即興で語ってみる演劇ワークを実施しました。

そこから身体化したもやもやを、ねんどで表現し、その表現された作品をベースに語り合う対話を行いました。言語化しづらい私的な葛藤や複雑な感情を、表現行為を通すことで、無意識を投影し、それをもとに他者との対話を促しました。

Day3 | アイディエーション



二回のワークショップを経て、参加者の方々には「さまざまな状況に対して当事者になりうる自分」を実感し、状況の自分ごと化・社会全体に横たわる問題の深掘りをしてきました。第三回目のワークショップでは、個々人に芽生えてきた、“わたし”

が持つ「産む」に対する前提への違和感、社会の当たり前に対するもやもやを発酵させ、自分自身の持つシャープな問いへと変化させていくためのワークを行いました。

ワークショップ前半では、自分の持ち寄ったもやもやや社会の当たりの輪郭を浮き彫りにするため、グループごとに問に対してツッコミ・ボケを行いました。

後半は、問いを中心にして「もしも～だったら？」を考えるワークを行いました。前半で明確になった問いや前提に対する意見・違和感をもとに、架空の世界を想像することで、現在の「産む」の価値観や当たり前を改めて問い直す時間となりました。

「産む」をみんなで少しずつ分け合って、対話を“生む”にはなにができる？			「産むだけ」「育てるだけ」どっちかだけ選べてもいいのでは？		
もしもコウノトリ(政府)が、1家族に必ず子どもを配属したら？ (産む人は性別問わず)	もしも5人組で子育てする世界だったら？	もしも「産む」ことにかんする当事者意識の高さ=その人の優秀さだったら？	もしも出産と育児はどちらかしかできない社会だったら？	もしも出産は自分ではしない、という社会だったら？	もしも子供は毎日同じ大人が世話してはいけないという法律があったら？
もしも「子育てが義務の家庭」と「子育てしちやいけない家庭」が決まっていたら？	もしも「産む」ことや家族について、性に関して、学ぶ専門塾があったら？	もしも性別に関わらず、全員が産まなければいけなかったら？	もしも育てられないけど妊娠してしまったり、出産だけをして見たい人間の専門施設があったら？	もしも親を子供が指名する制度があったら？ (1年毎に満期のある)	もしもお度もの教育は全部AIがおこなうことになったら

参加者の問いともしもの世界の一例

参加者の問いともしもの世界の一例

Day4 | メイキング



最終回のワークショップでは、これまで生まれてきたもやもやや問いを、つくることを通じて一度結実させること、アウトプットに対して他者からフィードバックをもらうことで自分の考えや意味に改めて気づき、ワークショップ終了後に個人が「産む」に対して向き合っていくための素地をつくるためのワークを行いました。

第三回のワークショップ・宿題で検討していた、「もしも～だったら？」の世界にある商品等を想定し、一〇〇円ショップなどで集めてきた材料を組み合わせ、各々で作品を作りました。その後、自分が作ったアウトプットに対して別の人に解釈をもらうことを通じて、あらためて作品に対する意味付けをしました。

最後に、全四回のワークショップの総括として、リフレクションシートを使った内省の時間を取り、自分のなかで起こった「産む」に対する問い直しやあらたに生まれた変化、また、これから自分が大切にしたいこと・考え続けていきたいことなどを書き記しました。

3. コンセプト提案・作品制作

リサーチとコデザイン・ワークショップの過程から得られた示唆をもとに、事業後の活動を見据えたコンセプト提案および、各アーティストによる作品制作をはじめました。

コンセプト提案

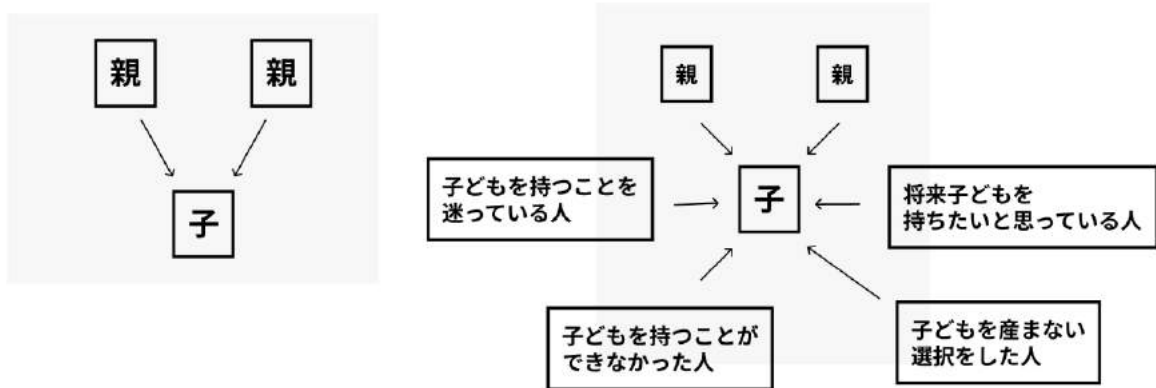
――産むひとも、産まないひとも、産めないひとも。産みたいひとも、産もうと迷っているひとも。それぞれの産むへの向きあい方を受けとめられる社会って、どんな社会だろう。

リサーチとワークショップを経て、参加者の方々が抱えるもやもや、その背後にある社会の当たり前が輪郭を帯びてきました。「自分だけで子どもを育てる当たり前」に負担や不安を感じるひとや「産むと育てるがセットである当たり前」に違和感を感じ、産まずに育てる選択肢を望むひと。現在では「結婚したら子どもを産むことが当たり前」なために、産めない・産まないひとが感じる重圧をなんとかしたいといった声も。

そこで、わたしたちが提案したいのは「子育てがもっとコモンス化する社会」。コモンスとは、ともにケアすることで維持や管理をしていく、共同の価値や資源のこと。「子どもは社会の宝」とよく耳にします。これは、旧来の社会の前提でした。しかし、地域のつながりは弱まり、出産・育児は”個人の選択＝自己責任”が現状です。

子育てをしない自由も認めながらも、個人化しすぎた子育てから、多様な人々が共同で、しかし、それぞれの関わり方でおこなう子育てへ。それはたとえ産めなくても、産まなくても、子育てにかかわる可能性に満ちた世界。

これ自体は新しいことではありませんが、現代だからリアリティを帯びる、”共同子育て”のかたちがきっとある。ここでは、3つのシナリオを提示します。



五助家族 | もしも5人組での子育てが当たり前だったら？

近年では「拡張家族」のように、ひとつの住宅をシェアしながら、共同生活をする暮らしや家族のかたちが現れています。では、「産む」の多様な状況をめぐり、家族像を想像しなおしてみたら？たとえば、不妊により子どもが産めないひとや、結

婚はしたくないけど子育てしたいひと、同性カップル。また、シングルやカップルだけで子育てをする負担も深刻化しています。

この世界では、ひとり親・ふたり親だけでなく5人の親による共同子育てが、ある自治体で実験的に制度化された世界。もしも、親が5人いる家族構成が当たり前だったら、親は、子どもは、家族は、そして産むこと・育てることのありかたはどう変わりうるのでしょうか。あなただったら、それを望むでしょうか。

子育て共同組合 | もしも、子育てをベースにした地域協同組合が当たり前だったら？

「地域で子育て」「地域で子育てを見守る」と声があがるようになって日らしいですが、実情は家庭内または、子どもがいる家庭同士でしか関わりを持つことは難しいのが現状です。もしも、ほんとうの意味で「地域ぐるみでの子育て」が実現できたら。

この世界では、子育て中の家庭だけではなく、既に子どもが家を出て一人暮らしの高齢者、近い将来子どもを持つかどうか検討しているカップル、子どもを産む・育てることをこれから学んでいく学生、子どもを持たないこと決断しているが何かしらのかたちで子育てに関わりたい人が、一緒にお金を出し合っって一つのコミュニティを運営しています。

同じ地域で暮らす、「家族」よりも大きくゆるやかな共同体としての「子育て協同組合」。家族と地域が地続きにつながり、「子育て」を軸に名実ともに一緒に子育てを行うとしたら、産むこと・育てることのあり方はどう変わりうるのでしょうか。あなただったら、それを望むでしょうか。

Child Care Chain | もしも、不特定多数の人との子育てがあたりまえだったら？

産むことと、育てること。これらの異なる行為が、一つのパッケージになっていることで、産む選択におけるプレッシャーや窮屈さを感じる方もいるのではないしょうか。

そもそも、育児とは「親」だけが行うものなのでしょうか。保育園や地域の人はもちろん、社会で起こる関わり合いはすべて、子どもに影響を与えます。広い意味では、社会全体で子育てしているともいえるのです。

この世界では、これまで「育児」とはみなされいなかった子どもたちと関わり合い（例えば、伝統技術を教えることや遠い異国の人とメタバース上で言語交換や異文化交流など）と、ケアワークとしてほとんど表に出てこない子育てにおけるマイクロタスク（例えば、献立の検討や子送り迎えなど）を可視化することができます。

もし、今まで「育児」と定義されていなかったものが、「これも育児だね」という認識に変わったら、産むこと・育てることの選択肢や考え方はどう変わりうるのでしょうか。あなただったら、それを望むでしょうか。

参加アーティストと作品

井上 裕加里 | 血のつながりと家族のかたち

井上 裕加里

現代美術家 井上 裕加里のHP

https://www.google.com/url?q=https://www.inoueyukari.net/&sa=D&source=calendar&usd=2&usg=AOvVaw29kkJ5d9K5zr92X_qw7ujY

「家族はどうしたら家族になれるのか？」という疑問に対して今回の作品を制作しました。男女は婚姻届を出せば家族になれる。現在の日本では、血縁関係を元にした家族関係が基本です。しかし、血縁関係に囚われない新たな家族の形を実践する人々もいます。

かつて日本における家族のあり方は非常にフレキシブルであったと言われていました。しかし、明治以降に西洋の「個人 (individual)」という概念が「家族」の形を変化させました。

そこには日本人の集団の中の家族のあり方と大きく違うものがあり、様々な問題を孕んでいるように感じます。


私は、現代の日本社会における理想の家族のあり方がどのようなものかを考えていきたいです。

今回の作品「血のつながりと家族のかたち」は、血縁以外で家族になった方や血縁にこだわらず家族になりたいと希望している方に参加して頂きます。参加者は心理士の前で、思い描く家族像の話と絵を描いて頂きます。今回、アートセラピーをご専門の心理士の方に参加者の絵を見て頂くこととなりました。絵を描くことや造形をすることは、自分自身の意識の外にある感情まで表すことがあります。

個人が持つ理想の家族像には、例え同じ時間を過ごしても血縁であっても異なる場合もあり、逆に同じ時間を過ごしていない他人でも同じような家族像を描く場合もあります。社会が複雑で多様になる現在においても個々の理想とする家族像によって繋がっていくことで人々は心の拠り所や自分のアイデンティティを確かめることができるのではないのでしょうか。

GROUP | Families' plan

GROUP

 <https://www.google.com/url?q=https://groupatelier.jp/&sa=D&source=calendar&usd=2&usg=AOvVaw23cPYXTB4Xgvb7bJilzxJz>



来として、建築の空間構成や部屋の規模、設備や構造のあり方へと反映させることです。だから計画には、未来をさしあたり確定する決断がともないます。


「産むこと」に関しても例外ではなく、家をつくるためにまずもって必要なのは、将来の「家族形態」を確定させることです。子供部屋を計画に組み込むかどうか、という単純な判断の内にさえ、「産む」にまつわる重大な決断があるはずで、ほんらい不確定で、不安定であるはずの「産む」にまつわる可能性は、「計画すること」とはどこまでも相容れないのかもしれませんが。

この問題は、規模の大きな集合住宅においてより深刻になります。どんな人々が入居するかわからない状況において想定されるのは多数派の家族形態（核家族）であり、その生活にフィットするnLDK型の間取りだからです。そして、「同じ間取り」が連続・集合するとき、そこでの平面＝プランの選択は、「同じような家族形態」の人々を結集させる暗黙の強制力のようなものとして作用します。

産むにまつわる意思やとりうる選択肢の複数性を受け止めた「計画」は、どうすれば可能になるのでしょうか。「Families' plan」はこのような問いを前提としたプロジェクトです。まず、これまで建築家が取り組んできた家族形態と間取りの関係を調査し、年表というかたちで提示します。それを踏まえた上で、異なる家族形態の世帯が同居する大規模なアパートメントを提案し、時間の経過とともに住環境を弾力的に変化させていく暮らしの可能性を検討します。

TAK STUDIO + ふしぎデザイン | ハリコドモ

ふしぎデザイン | Fushigi Design

 <https://www.google.com/url?q=https://www.fushigidesign.com/&sa=D&source=calendar&usd=2&usg=AOvVaw03uvpLAROaDHx5cWLYIdub>



takstudio

Industrial designer based in Japan. We integrate poetic sensibility and aesthetic of industrial to create new interior products. In our approach, we develop new ideas based on what

T <https://www.google.com/url?q=https://takstudio.tokyo/&sa=D&source=calendar&usd=2&usg=AOVvaw1sfoo94Jv2ryEol1UpTlqY>



ハリコドモは、セクシュアルマイノリティの方々や不妊治療に悩む方々と話すなかで生まれた、5種類の鳥の形をした張り子のお守りです。産み育てることが女性だけの役割ではなくなり、産めるという感覚が当たり前ではない現代、犬張子のような”安産のお守り”は、安産多産が幸せ、女性がお腹を痛めて産むことが幸せ、というステレオタイプを助長していないでしょうか？

また、今まで安産・多産・子宝繁栄のお守りは多く存在しましたが、それ以外の考え方や悩みは見えないものとされてきたのではないのでしょうか。私たちは今までマイノリティとして扱われていた希望や祈りを具現化したお守りを、様々な鳥たちの産み、育てる行動にヒントを得て制作しました。この作品を通して、鑑賞者が出産や育児の多様性について知り、考えるきっかけになればと思います。

ペンギンの張り子：どのような家族のかたちでも子どもが健やかに育つようにという思いが込められています。

ハシビロコウの張り子：夫婦が自身の生活を大事にしながら、マイペースな子育てができるようにと願いが込められています。

ジュウイチの張り子：どのような形の家族でも子どもが元気に育つようにという願いが込められています。

モリフクロウの張り子：迎え入れた家族と幸せに暮らせるようにという願いが込められています。

エミューの張り子：男性が子育てをする時間を過ごしやすくなるようにという願いが込められています。

碓井ゆい | 雪の子どもたち

home

<https://www.google.com/url?q=https://yuiusui.com/&sa=D&source=calendar&usd=2&usg=AOVvaw1WWWidtX6heE7OqHhXYjdPf>

体外受精に代表される生殖補助医療では、通常体内で行われる卵子と精子の受精が体の外で行われます。その後細胞分裂して胚や胚盤胞に成長した受精卵は、子宮に移植され着床することにより、妊娠に至り、出産へとつながります。このような治

療の過程で得られた胚のうち、移植されなかった胚は余剰胚と呼ばれ、-196°Cの液体窒素の入った保存用タンクの中で凍結保存されます。

初めに移植した胚が出産に至らなければ、凍結された胚が融解され、子宮に移植されます。あるいは、移植した胚が赤ん坊として生まれてくれば、凍結胚はその子の妹か弟をつくるために移植されるかもしれません。

このような治療の中で、移植されることなく凍結され続ける胚たちの存在があります。理論的には半永久的な保存が可能ですが、日本産婦人科学会の指針では生殖可能年齢までとされており、患者たちはいずれ、移植するかまたは廃棄するか、の決断を迫られることとなります。その決断の背後には様々な立場や葛藤があり、そしてそれらが他者と共有されることは、殆どありません。

この作品は、凍結された「胚というかたちをした子どもたち」ーアメリカでは、snowbabyと呼ばれているそうですーは、凍結タンクの中で何を思いどんな会話をしているのだろう、という擬人化のイメージを形にしたものです。そしてまた、胚の誕生に大きく関わる胚培養士という職業により、この作品は成立しています。

医療技術の進歩に伴う新しい感情、そしてそこから生まれる想像力を、より多くの人たちー不妊治療を経験した人も、していない人もーと共有することを意図しています。そしてそれが、いま私たちが生殖や生命について考える際の一助になれば、と思っています。

4.展示

展示概要

産まみ（む）めも

公共とデザインによる、産むの物語を問いなおす展覧会『産まみ（む）めも』。本展では、さまざまな当事者との対話と表現を通じた協働制作のプロセスおよび5組の作家による作品をご紹介します。産まない・産みたい・産む・産めない・産もうか...といった複雑な「産む」の向きあい方を問いかけます。複数の可能性に想いを馳せ、ことばを交わし、一人ひとりが「産む」の物語を紡ぎなおすきっかけになることを願います。

■会期

3/18(土)-3/23 (木) 12:00-20:00

土日と祝日を挟みます

■会場

渋谷OZstudio

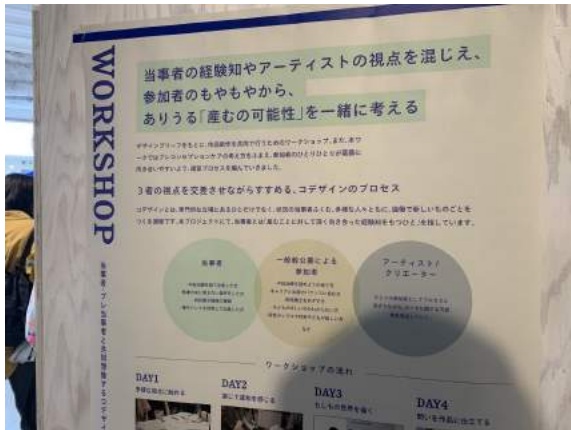
OZstudio渋谷について



wi-fi導入しました！ 渋谷駅徒歩8分の場所に60平米の広さのギャラリースタジオをオープンいたしました。2014年築の新しいビルの3階、南南東向きの窓で午前中は特に直射日光がたっぷり

OZ <https://ozgallery.jimdo.com/ozstudio%E6%B8%8B%E8%B0%B7%E6%9D%B1open/>

展示風景



リフレクションボード（来場者のコメント）

- 「産む」も「育てる」も今までの固定観念にとらわれず、多様性に富んだ考え方・制度づくりがこれからの人間社会に必要なだと思う。
- 価値観は理解できる一方で、伝統的vs進歩的という分断が起きる現状をどう捉えるべきか考える必要がある気がしています。いかにイデオロギーの分断を越えられるかが重要？
- 分は今のところを産みたいと思っていないけど、パートナーともオープンに話してみたいと思った。「産む」ことに紐づけられがちな女性性や審美性についてももう少し考えてみたい
- リサーチのプロセス・メンタルモデルを見て自分が今どこにいるかとか周りの人がどうかとか想像できて、気持ちが軽くなりました。
- 不妊治療について考えてみたこともなかったが、明るさと暗さの両面がしれて興味深かった。現状についてもっと詳しく友人やパートナーと話して見たいと思った
- 「子育て」に何が入るのか？もっと広げて考えたくなった。「まち」で育てるとは
- 産む親も育ての親も、こどもにとっては大切な親
- 人と話すことを避けていた（おかしい・変だと言われることが怖くて）私にとってこの展示はまた過亜属について考えよう、模索しようとするきっかけになりました。
- 雪の子どもたちの会話は、私が産まない、と決めなければ出会えたかもしれない会話なのかと思ひ、やっぱり寂しさを感じました。（会話がかわいくて、むじゃきで）
- 産んだ子どもをかわいいと思えなかったらどうしようと思ひ踏み出せないでいる